

値域と傾向との板挟み

経済総合分析 木下博之

1. はじめに

相場において、値域の中で上げ下げを繰り返す期間と、上げないしは下げが優勢となり、一定の期間内において、上げまたは下げの短調な変動に近似しうる期間がある。前者は、レンジ相場、後者は、トレンド相場といわれることがある。それぞれの局面では、買いと売りそれぞれに、相反する意義が生じ、市場参加者を板挟みの立場に置く。

2. ジレンマ

安く買い高く売る。それが、投資家にとっての原則である。それを率直に実践できるのは、レンジ相場においてである。ただし、トレンドが生じると、それは覆される。安くなったので買い時と判断するや否や、それが下げトレンドの始まりであれば、さらに安くなり、思惑は外れることになる。

3. 複合

相場において、レンジとトレンドは複合している。期間ごとにどちらかが優勢になり、それらは互いに訪れる。ただし、それぞれの期間の長さは均等でない。

例として、EUR/USD 相場において、2014年7月から2015年1月の間、下げトレンドにあり、その後は、レンジを行き来しているといえる。こうした数か月にも渡る長いトレンドは、政治、経済という巨視的な視点からも説明することができる。一方で、両陣営の材料が拮抗すると、上下に値がふれ巨視的には横ばいという、レンジの局面に入る。トレンドが優勢な期間ではマクロな分析が、レンジの局面ではミクロな分析が有効といえる。

なお、レンジとトレンドは、期間ごとに互いに現れるといえるが、一つの期間において折り重なっているともいえる。

4. 結び

レンジを読むミクロな分析とトレンドを読むマクロな分析の両方を理解し、あるときは使い分け、ある時は併用することが求められる。ただし、これは、論理的な矛盾を抱えており、投資家を葛藤に陥れる。これは論理的な矛盾であるため、A.I.が取引の判断に参入することによって、緩和するどころかより深まるといえる。投資は人類の課題の一つであるし、産業たり得ないともいえるが、我々の財政と家計と平和の礎なのである。

参考文献

アロンソン(2009). “テクニカル分析の迷信” パンローリング.

三浦良造(2005). “リスクとデリバティブの統計入門” 日本評論社.